三重県埋蔵文化財報告 164

高茶屋大垣内遺跡(第2次)発掘調査報告

津市城山1丁目所在

1997・3

三重県埋蔵文化財センター

序

「高茶屋　茶屋多し」と伊勢参宮名所図絵に記された高茶屋は、安濃津宿の南にあたり、古くは参宮街道の文字通り茶屋としてにぎわいました。街道の面影は随所に残り、歴史を感じさせる町並みとなっています。近代に入ってからは、参宮鉄道の開通により一志郡内の貨客の集散地となってにぎわいを見せていました。昭和に入り、太平洋戦争中に津海軍工廠が高茶屋地区西部に設置された際に、海軍共済病院が現在の県立高茶屋病院の場所に設置されました。県立高茶屋病院の前身ともいえるでしょう。高茶屋地域では、大正末頃から大規模な区画整理が行われたため、埋蔵文化財の所在についてはよくわかっていないことが多かったのですが、昭和61年には台地の南部から銅鐸が発見されるなど、注目を集めるようになりました。

今回、県立高茶屋病院の全面改築に伴い、高茶屋大垣内遺跡の調査を行いましたが、これにより高茶屋地域の歴史に新たな１ページを加えることができたのではないかと考えます。さらに、将来にわたって県民共有の財産として役立てていくことで、姿を変え記録となった遺跡を有効に活用していかねばなりません。

最後になりましたが、調査にあたって御協力をいただいた津市教育委員会、県健康福祉部県立病院課、県立高茶屋病院、作業をお助けいただいた地元自治会各位に感謝を申し上げ、冒頭の御挨拶といたします。

平成９年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　奥　村　敏　夫

例　　言

1　本書は、県立高茶屋病院整備事業に伴い緊急発掘調査を実施した、津市城山１丁目に所在する高茶屋大垣内遺跡（第２次）の発掘調査報告書である。

2　調査は平成８年度に行った。調査の体制は以下の通りである。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）
主　事　田中　久生　　研修員　前川　明男
技術補助員　石渕　誠人

3　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。写真は、遺構関係を田中・前川・石渕が、遺物を田中が撮影した。全体の編集は田中が行った。

4　調査にあたっては、津市城山地区周辺在住の各位、津市教育委員会、県立高茶屋病院、および県健康福祉部県立病院課から多大な協力をいただいた。

5　挿図の方位は、全て座標北で示している。なお、当該地域の磁針方位は西偏６°30′（平成２年国土地理院）、真北方位は東偏０°18′である。

6　本書では、本年度調査を実施したＡ～Ｄの４地区のうち、遺構については全てを、遺物についてはＤ地区のみを掲載している。Ａ～Ｃ地区の遺物については、来年度以降予定されている第３・４次調査と合わせて報告することとする。
　なお、写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

7　当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき　　「坏」があるが、「杯」を用いた。
わん　　「椀」「碗」「鋺」があるが、「椀」を用いた。

8　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言……1
　1　調査に至る経過
　2　調査の経過
　3　調査の名称
　4　調査の方法
Ⅱ　位置と環境……3
　1　遺跡の位置
　2　歴史的環境
Ⅲ　調査の成果～層序と遺構～……5
　1　調査区の設定
　2　基本的層序
　3　主な遺構
Ⅳ　調査の成果～D地区の遺物～……13
Ⅴ　調査のまとめ……14

挿図目次

図1　遺跡位置図……3
図2　調査区配置図……4
図3　A地区西辺土層断面図……5
図4　D地区北辺土層断面図……5
図5　SH4実測図……6
図6　調査区平面図……7～8
図7　SH6実測図……9
図8　SH6遺物出土状況図……10
図9　SH8実測図……11
図10　SB35実測図……12
図11　SB36実測図……12
図12　SD2実測図……12
図13　D地区出土遺物実測図……13

図版目次

図版1　SH6遺物出土状況・同部分……15
図版2　D地区全景……16
　　SH8・SD10
　　SB35・SB36
図版3　D地区出土遺物……17

表　目　次

表1　遺構一覧表……7～8
表2　遺物観察表……13

Ⅰ．前　　言

1　調査に至る経過

県健康福祉部は、県立高茶屋病院が開院以来40年余りが過ぎ著しく老朽化が進んできたことに伴い、新施設に整備する計画を策定した。

県教育委員会文化芸術課及び埋蔵文化財センターには、平成７年８月に当該計画があることが知らされたが、工事内容等事業の詳細については不明な部分が多かった。そのため、近接する小森上野城（津市遺跡№473）を対象遺跡として埋蔵文化財の所在を報告した。

平成８年３月に、関係者を集め第１回の協議が行われた。その結果、事業は病院建物全ての建て替えであること、事業範囲は昭和55年に調査された大垣内遺跡（市遺跡№264）隣接地に及ぶこと、平成８年10月からⅠ期工事が始まることが明らかになった。

８年度に入って、遺跡範囲を確認する必要があることから、当センター係長前川嘉宏を担当者として５月７日～15日に試掘調査を行い、事業範囲内の遺跡面積は12,500㎡であることを確認した。一方、県立病院課は建物工事等の範囲を確定した。

その結果、平成８年度内に2,100㎡、平成９年度以降に7,100㎡（後に検討の結果、7,850㎡となる）が調査が必要であることが判明した。この内、平成９年度以降については別途協議を継続することとするものの、８年度分については年度内に調査が必要であることが確認された。埋蔵文化財センターとしては８年度予定事業外の対応であるため、要員を補強し調査に臨むこととした。

2　調査の経過

a　調査の経過

今年度の調査予定地はＡ～Ｅの５地区に分かれる。病院敷地内であり排土場所がほとんどないため、表土は重機で掘削し場外搬出することとした。

Ａ地区から着手したものの、黒色系土壌（いわゆる「黒ボク」）の堆積が厚く、遺構検出面まで約１m近くあり相当な量になった。また、縦横に走る水道管などに注意しつつも破壊してしまうこともあり、表土除去は大変な作業となった。

作業員を投入しての調査は10月14日から開始した。調査は、天候にも恵まれ順調に進み、11月16日にはＡ地区を対象として現地説明会を開催するに至った。当日の見学者は約150名であった。

着手前には、Ａから順にＥ地区へと進む予定であったが、Ａ地区を調査するうちに、Ｂ地区についてはＥ地区の建物解体を待って同時に調査することとし、Ａ地区の後、Ｄ地区に着手し、Ｃ、Ｂ地区と進めることとした。しかし解体工事の関係でＥ地区は次年度調査となり、Ｂ地区のみを調査した。徐々に寒さが厳しくなる中、作業は12月20日に終わり、１月に入って残った遺構実測を行い、全てを終了した。最終的な調査面積は1,600㎡となった。

病院を運営しながらの調査のため、来院された方々や通勤する職員に不便をかけることとなった。

また、水道管修理などには、病院施設管理課の手を煩わせた。それでも、大きな事故もなく調査を終了できたのは高茶屋病院をはじめ、関係各位の誠意ある対応の賜といえる。特に、実際に現場作業にあったっていただいた方々は、北風が強まる中をほとんど休まれる日もなく勤めていただいた。ここに御芳名を記して謝意を表します。（順不同、敬称略）

川原田了、塩見美恵子、海老原しのぶ、中村昭一、広田剛、北方寛司、小田烈生、渡部ツヤ子、小西常夫、山城章優、上山常夫、平林あい子、平林一美、平林一志、荒川敏美、片岡幸子、関塚秀之、緑光雄、丹野貞夫、松吉道幸、山崎文雄

b　調査日誌抄

10月４日　Ａ地区、重機による表土除去開始。

10月11日　ベルコン、機材など搬入。

10月14日　作業開始。調査区北東隅から検出を開始し、西に向かって進む。遺構検出面は黄褐色土。

10月18日　北西隅に到達。南に向かって検出を進める。SK1、SH4が検出された。

10月21日　SK1、SH4埋土除去開始。SH4の南東1/4からは土器が密集して検出された。

10月22日　調査区南西隅に土器の密集する箇所があり、竪穴住居の存在が想定される。SD3から灰釉陶器椀が出土。SK5からは完形に復元可能な土師器台付甕を検出した。

10月23日　SK1完掘。22日に着手した土器密集箇所は東辺、西辺を確認、竪穴住居(SH6)とみられる。

10月24日　SK5出土状況撮影及び実測。
10月25日　SH4土器出土状況撮影、実測。SH6には大量の土師器が含まれていることが判明。並行してD地区の表土除去に着手。
11月４日　D地区、検出に着手。遺構面は明褐色土。堅く締まっており、作業は困難が予想される
11月５日　D地区検出続行。A地区SH6土器出土状況撮影。
11月７日　SH6の土師器は大半が台付甕である。その上、意図を持って置かれたような状況が窺える。D地区の検出続行。C地区表土除去。
11月13日　SH6再度土器出土状況撮影。
11月14日　A地区。ラジコンヘリコプターによる垂直写真撮影。SH6床面精査。しかし、柱穴は見つからず。中日新聞社取材。
11月15日　A地区全景写真、及び個別遺構撮影。南郊中学校あすなろ分校３年生15名見学。
11月16日　午前中に南郊中学校３年生７名見学。同中学あすなろ分校２年生15名見学。午後、現地説明会を行う。参加約150名。三重テレビ放送取材。予想外の反響に担当者驚く。
11月19日　D地区南辺中央付近から、竪穴住居(SH33)を検出。A地区平面実測のための基準点設定。
11月21日　A地区遺構平面実測開始。
11月22日　A地区遺構平面実測。SH4カマド精査。SH6土器取上げ終了。
11月25日　A地区平面図終了。SH6の煙道かとも考えられる溝を検出、掘削した。しかし、周囲に被熱の痕跡はない。
11月28日　SH4カマド精査終了、全景写真撮影。SH6壁周溝検出、全景写真撮影。D地区、ベルコン搬出。
12月３日　D地区写真撮影。C地区へ道具搬入。
12月４日　A地区埋め戻し完了。C地区検出、遺構埋土掘削完了。D地区平面実測のための基準点設定。
12月６日　C地区写真撮影。B地区表土除去開始。
12月10日　B地区SH8検出。
12月16日　B地区SH8出土状況写真撮影。
12月19日　B地区からベルコン搬出。清掃の後、全景写真撮影。作業員全員で記念撮影。
12月24日　B・C地区平面実測のための基準点設定。
12月26日　現場事務所撤収。
１月６日　B・C地区平面実測続行
１月８日　全ての現場作業を終え、撤収

c　文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法（以下「法」という）等にかかる諸通知は以下により、文化庁長官等に行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
平成８年７月29日付け教文2012号（三重県知事通知）
・法第９８条の２第１項（文化庁長官あて）
平成８年８月26日付け教文1810号（三重県教育委員会教育長通知）

3　遺跡の名称

本遺跡は、行政上は津市城山１丁目に所在する。しかし、昭和55年度に大垣内遺跡として調査されており、『津市遺跡地図』にも大垣内遺跡と記載されていることから遺跡名は踏襲することとした。ただし、昨今の調査件数増加により「大垣内」と名付けられる遺跡が多いため、他の大垣内と区別する意味で「高茶屋」を冠し「高茶屋大垣内」と呼称することとなった。なお、55年度の調査を第１次調査と掲げ、今年度の調査は第２次調査とした。

4　調査の方法

a　小地区の設定

今回の調査は４地区に分かれる。それぞれの間には建物があり見通しが利かないため、全体を統一して地区設定することは困難である。そのため、各地区ごとに調査区内を４ｍ四方の升目で区切ることによって小地区を設定した。

各地区とも北から数字、西からアルファベットを付け、升目の北西隅の番号をその小地区の符号とした。なお、この小地区設定は国土座標軸とは無関係である。

b　遺構図面について

各調査区とも座標軸に合わせて、1/20で作成した。個々の遺構のうち、遺物の出土が明瞭なものについては、個別に1/10実測図を作成したものもある。

c　遺構番号等について

遺構番号は、掘削及び遺物取り上げ時は各小地区ごとに付加し、調査終了後、通し番号とした。

なお、遺物への注記は、通しの遺構番号を使用している。今回検出した遺構は見た目の性格により、以下の略記号を付加した。

ＳＢ―――掘立柱建物　　ＳＤ―――溝
ＳＨ―――竪穴住居　　ＳＫ―――土坑
pit―――ピット、柱穴

II．位置と環境

図１　遺跡位置図（1:50,000）（国土地理院 1:25,000　津西部・津東部・大仰・松阪港）

1　遺跡の位置

高茶屋大垣内遺跡(1)は津市南部の台地に所在する。津市南部から久居市にかけては、布引山地を分水嶺として東になだらかに延び伊勢湾に臨む丘陵の縁辺部にあたる。標高20m前後のなだらかな起伏を持った台地が広がり、高茶屋台地と呼ばれている。

南には、伊勢平野のほぼ中央部を東西に流れる雲出川が、布引山系の南部を削り下流域に沖積平野を形成している。雲出川中下流域左岸、高茶屋地区東部及び南部から雲出地区にかけては、近年は都市化が進みつつあるものの豊かな水田地帯が広がっている。しかし、高茶屋台地東方は、近世以前には塩田が広がり、相川河口付近は入り江だったようである。

今回調査対象となった高茶屋大垣内遺跡は、高茶屋台地東縁の、北を相川に、南を天神川に区切られた地域に位置する。

行政的には津市城山１丁目地内である。

2　歴史的環境

高茶屋地区は、開発が早くから行われたこともあってか、遺跡の存在は余り知られていなかった。これは、大正から昭和初期に行われた区画整理や海軍工廠が設置されたことが少なからず影響していよう。高台であり住居地域としての環境は優れていると思えるのだが、知られている遺跡は少ない。

発掘調査例も少なく、昭和45年本宮遺跡[1](2)、昭和55年高茶屋病院浄化槽設置に伴う本遺跡の調査[2]、昭和63年四ツ野Ｂ遺跡(3)くらいである。このときの本遺跡の調査では古墳時代後期の竪穴住居２棟、

平安時代前期の掘立柱建物などが、四ツ野Ｂ遺跡[3]では古墳時代前期の竪穴住居が90棟検出されている。

また、四ツ野Ｂ遺跡では昭和61年に銅鐸[4]が発見されている(4)ことも注目される。銅鐸は近畿式のもので全高60cm近くになる。

この地域の古墳としては、小森山古墳群[5](5)と四ツ野古墳が知られるのみである。四ツ野古墳[6]は、四ツ野Ｂ遺跡の調査区内で発見されたもので、６世紀中頃の木棺直葬墳であることが確認された。しかし、小森（高茶屋地区の旧称）には30余りの塚があったとも云われており[7]、古墳などがあった可能性は高い。

相川を挟んで北に約1.5km程離れた台地上には、池の谷古墳[8](6)がある。全長80m以上の前方後円墳で中勢地域では抜きんでた規模を持つ。この地域の盟主墳であろう。古墳時代中期に位置付けられている。

生産遺跡としては、三重県では最古段階（TK23号窯期）の須恵器窯跡である久居古窯跡群[9](7)や、藤谷埴輪窯跡群[10](8)が北西方向に位置している。また、発掘調査は行われていないが台地のすぐ北側に法ヶ広窯跡群[11](9)がある。

奈良・平安時代では、本遺跡以外に遺跡はみられない。台地の南方、一志・嬉野地域に目を向けると、中村川流域を中心に古代寺院の密集する地域であるが、こと高茶屋地域では、空白と言っても過言ではない状況である。雲出川左岸の沖積地低位段丘上には長持元屋敷遺跡[12](10)、赤坂遺跡[13](11)、雲出島貫遺跡[14](12)の複合遺跡が並ぶ。

中世には、この地域は安濃城を本拠地とする長野氏の勢力下であった。これに関氏が加わり、北朝方に属した。対して雲出川以南は南朝方であった北畠氏の勢力下であった。このため、高茶屋地域周辺には小森上野城[15](13)、小森城[16](14)、やや離れて垂水城[17](15)、池の谷砦[18](16)、木造城[19](17)など、いくつかの城や砦が築かれた。

近世には、参宮街道が台地の東縁部をとおり、行き交う人々でにぎわったことであろう。雲出地区も西島八兵衛による雲出井開発以来、次第に新田開発が進み、水田が増えていったものと思われる。

近代[20]には、参宮鉄道の全線開通を機に、一志郡内からの物資、旅客の集散地として、高茶屋駅は相当なにぎわいをみせた。大正期には大規模な区画整理が始まり、昭和に入って海軍工廠が設置され、高茶屋地区は工場用地として姿を変えていく。海軍工廠の整備にともない、小森上野地区には工員住宅及び海軍共済病院が配置された。この海軍共済病院が現高茶屋病院の前身ともいえるようである。

このような急激な開発の渦中にあっては、知られずに消えていった遺跡も数多いものであろうと考えられる。しかし、建物下に残されていることも考えられ、今後の調査に期待するものは大きい。

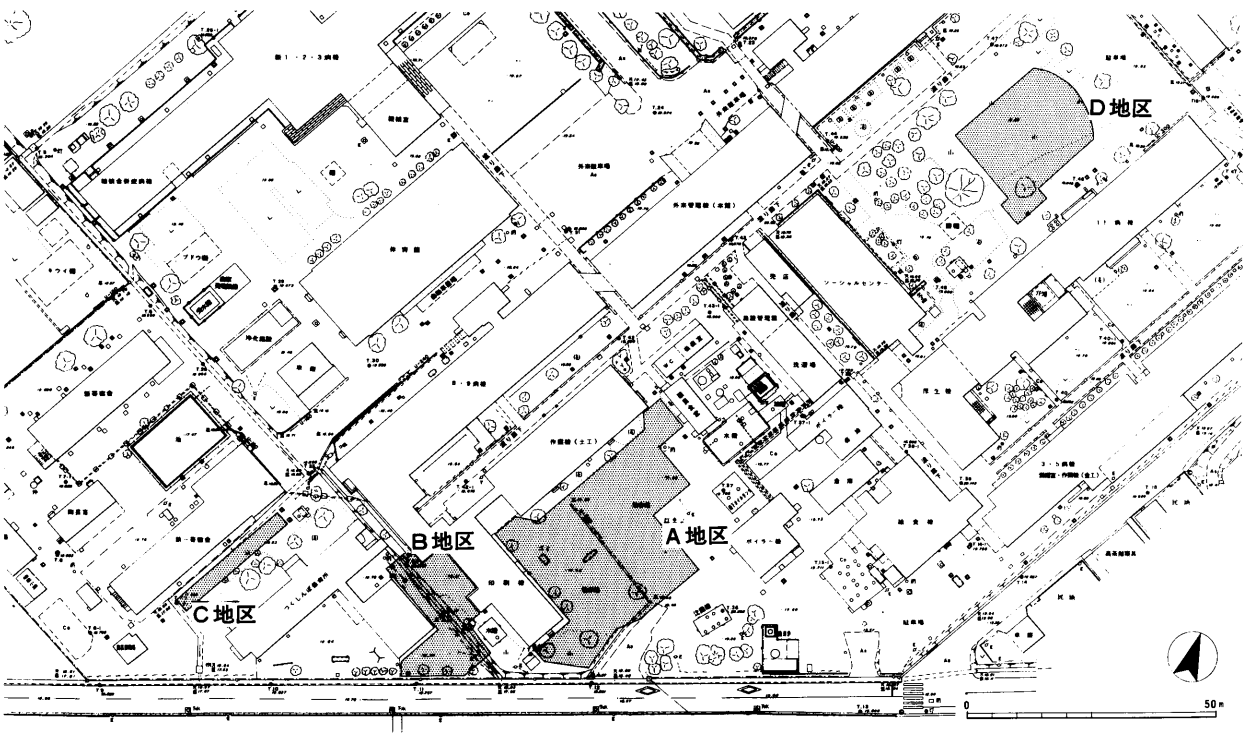


図２　調査区配置図（1:1,500）

Ⅲ．調査の成果　―層序と遺構―

1　調査区の設定

平成８年度はＡ～Ｄの４地区を設定し、調査を実施した。建物の隙間を調査することが多く不整形な地区設定になっている。また、病棟の増改築や水道管、排水管、水路などで攪乱されている部分が多い。設備類は、大半現在も使われているため除去できず、攪乱であっても、検出したのみで掘削不可能であったものも多い。

2　基本的層序

調査地の基本的な層序は次のとおりである。

Ａ・Ｂ両地区は地表から約30～50cmは、病院整備に伴う整地が行われている。特に、Ａ地区は駐車場となっていたため、砕石が厚く敷かれていた。

その下には、黒色土が２層堆積する。上層は約20cm程度でやや淡い黒色土である。下層は約20～30cm程度で上層に比べやや濃い黒色を呈し、小石を含んでいる。この２層は、量は少ないものの、遺物を包含する。

黒色土層の下に、黄褐色の、小石を含んだ粘質土があり、この層を基盤層として遺構検出を行った。

Ｃ地区は排水路、旧建物などで相当部分が攪乱されていた。そのため、調査区周囲の土層観察は意味のないものとなった。この地区には黒色土の堆積は認められない。表土は整地層である淡灰色土が約10cm程度堆積している。表土下には黄褐色土層があるが基盤層ではない。その下に黄褐色土礫混じり層があり、これが基盤層である。また、この地区の古墳時代の遺構の埋土は黒色土であった。そのためＡ・Ｂ地区で確認された黒色土層は、Ｃ地区では開発の過程で除去されたものではないかと考えられる。

Ｄ地区は花壇、築山などが設置され、中庭として憩いの場となっていたためか、整地は受けているものの大規模な改変は受けていなかった。

表土は灰褐色土である。表土下には、黒灰色土が約20～30cm堆積する。その下は数cmの褐色土を挟んで基盤層である明橙色土に達する。

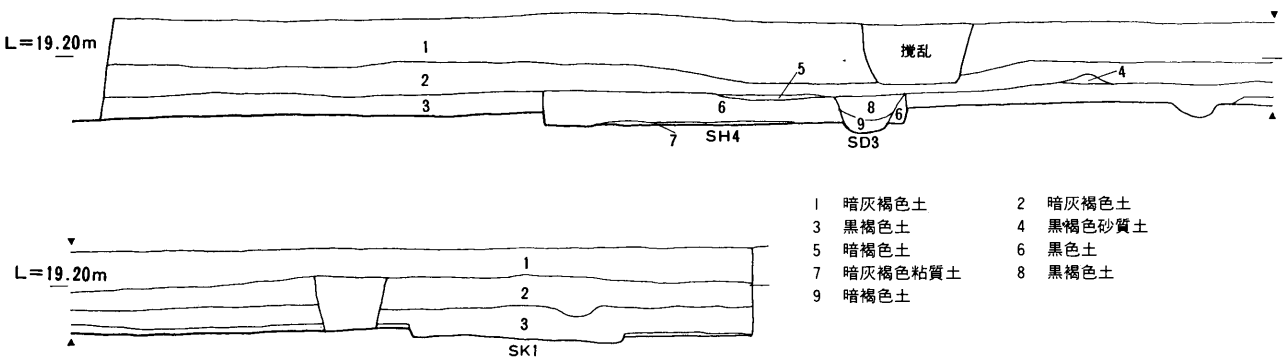


図３　Ａ地区　西壁土層図（1:100）

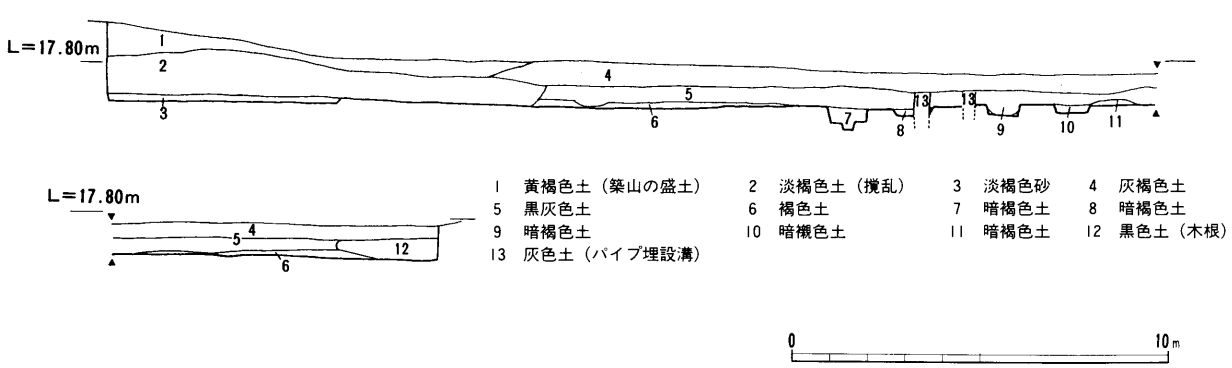


図４　Ｄ地区　北壁土層図（1:100）

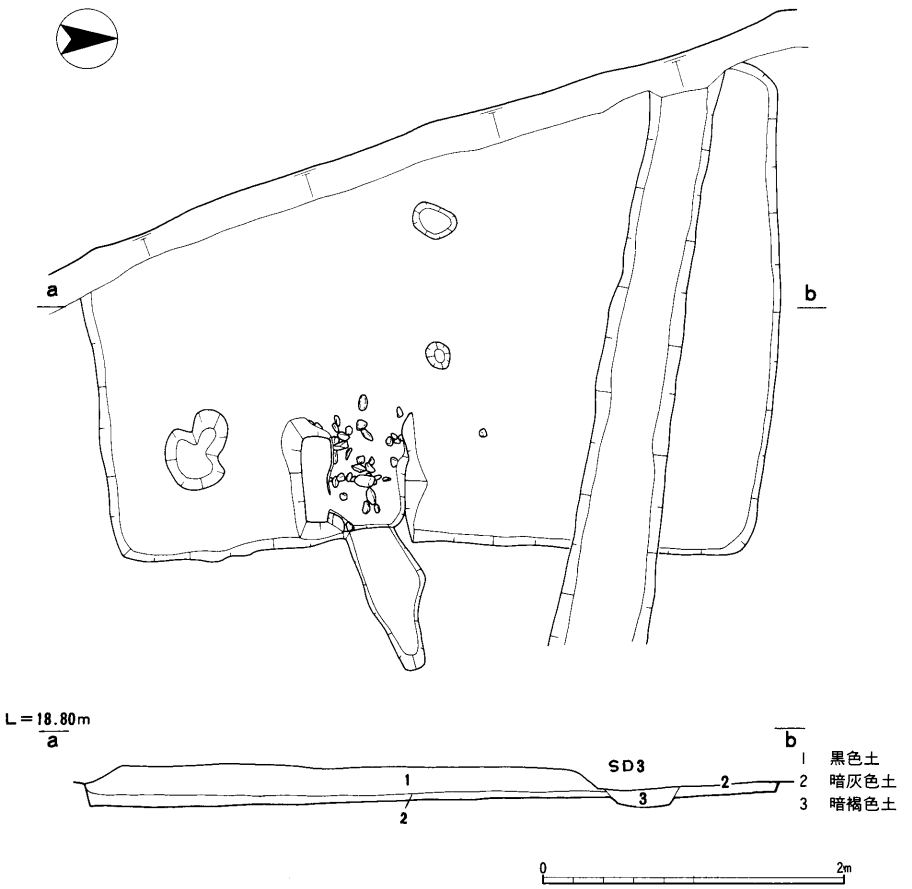


図５　ＳＨ４　実測図（1:50）

3　主な遺構

a　Ａ地区（850㎡）

病院の南駐車場で、今年度の調査区の内、最も広い地区である。

(1)古墳時代後期の遺構

竪穴住居ＳＨ４　調査区の西辺中央で検出した遺構である。東辺4.4m、検出面からの深さ0.15mを測る。方形の住居跡であるが、西半部は現建物の下になっており不明である。東辺の中央やや南寄りにカマドを持つ。カマドは一辺0.7mのほぼ方形で、石製支脚が残されていた。周溝、及び支柱穴は検出し得なかった。出土遺物は土師器台付甕・同壺・同高杯、土錘などで、須恵器はごく少量の破片が出土したのみである。他に、土器洗浄中に土器に付着した土から管玉が１点発見された。

竪穴住居ＳＨ６　調査区の南西隅で検出した。東西辺4.0m、南北辺3.3m、検出面からの深さ0.25mを測る、やや不整形な方形の住居跡である。周溝及び支柱穴、カマド、堅く締まった床面などは検出されなかった。そのため住居か否かに検討の余地を残す。

出土遺物は非常に多い。住居の南東部に集中し、床面からは約25㎝程度浮いた状態であるが、土器が隙間なく並べられたような状態で検出された。大半が台付甕であるが甕、高杯、椀なども含まれている。床面からは土師器甕片が出土した。

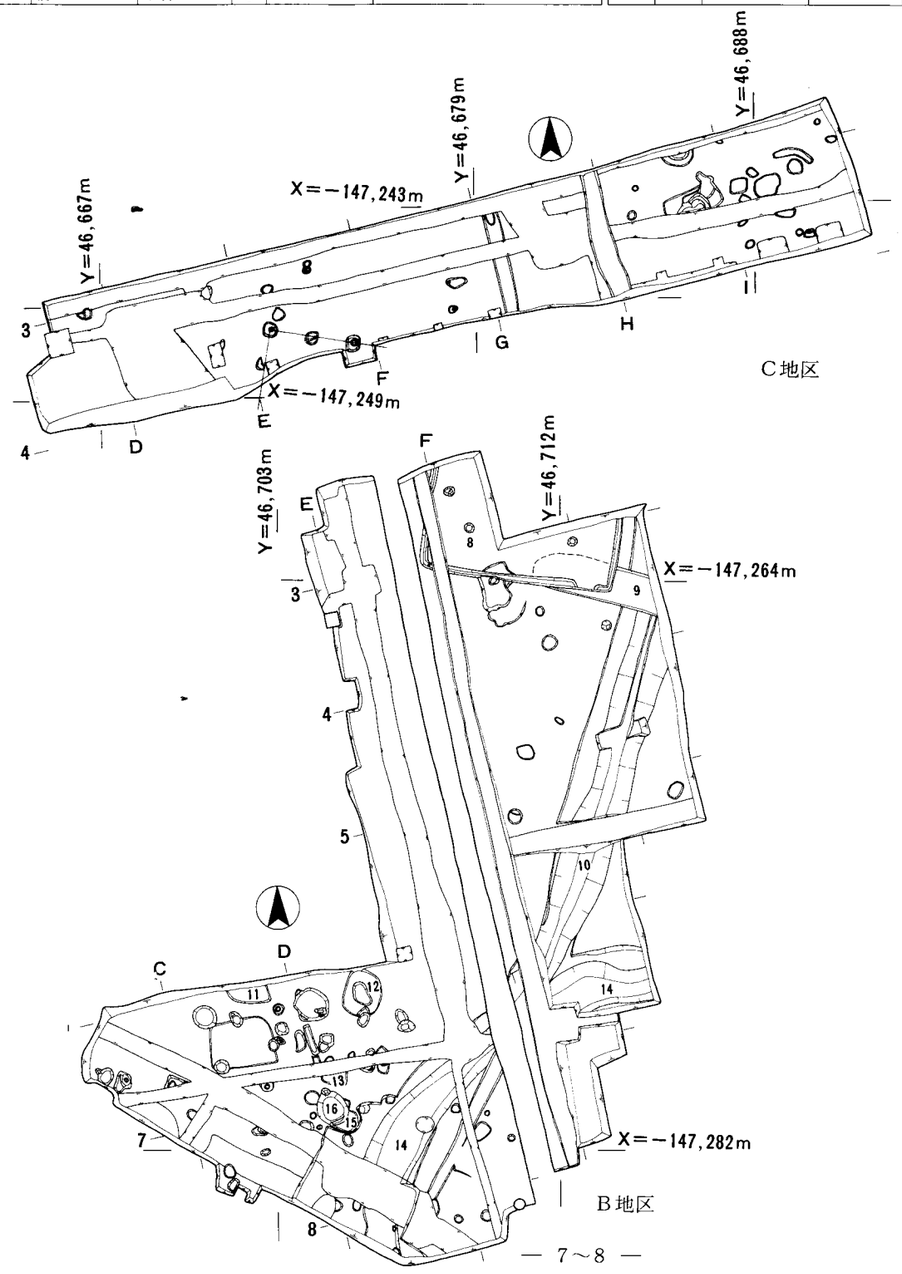
土坑ＳＫ１　調査区の北西隅で検出した。西半部を現建物の下になっており東西の規模は不明である。不整形であるが住居跡である可能性もある。南北3.2m、検出面からの深さ0.15mを測る。出土遺物には、須恵器蓋・俵瓶、土師器高杯・台付甕、土錘、鉄鎌などがある。

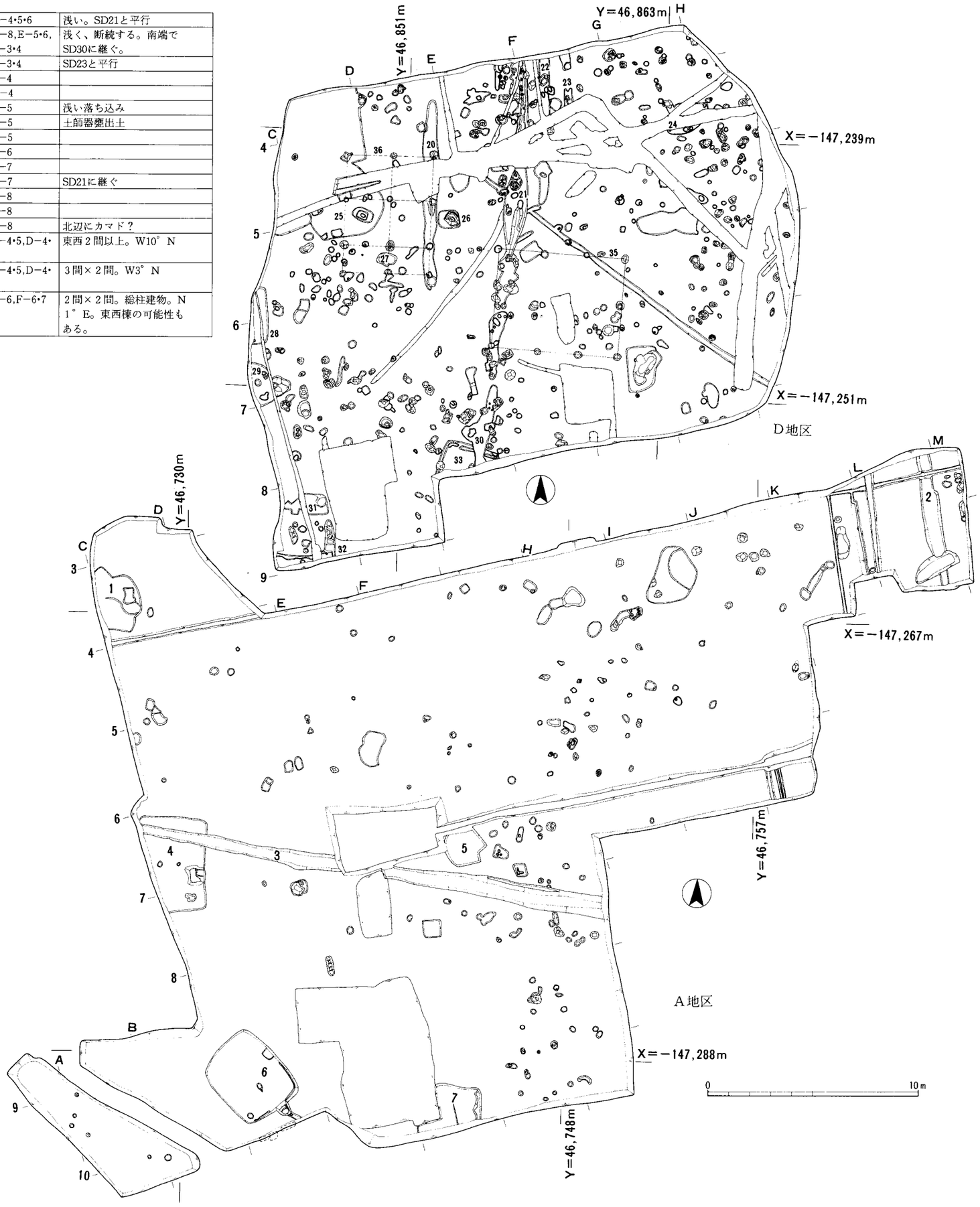
土坑ＳＫ５　調査区の中央部で検出した。長径2.0m×短径1.8mの楕円形を呈する。検出面からの深さ0.2mである。中央付近から、ほぼ完形に復元できる土師器台付甕１個が出土した。

土坑ＳＫ７　調査区の南辺中央で検出した。南半部は調査区外であり不明である。東西3.3mを測る。方形であるため住居跡の可能性もあるが、積極的に住居跡という証拠がないためここでは土坑とした。

出土遺物には土師器台付甕・高杯などがある。

略号	番号	性格	時期	地区	グリッド	特徴・形状ほか
ＳＫ	1	土坑	古墳後期	A	C−3	竪穴住居の可能性あり
ＳＤ	2	溝	不明	A	M−4	中世墓が切り込んでいた
ＳＤ	3	溝	平安	A	C・D・E−6,G・H−7	
ＳＨ	4	竪穴住居	古墳後期	A	C−6	東辺にカマド
ＳＫ	5	土坑	古墳後期	A	G−7	ほぼ完形の台付甕
ＳＨ	6	竪穴住居	古墳後期	A	C−9	遺物多量
ＳＫ	7	土坑	古墳後期	A	F−10	
ＳＨ	8	竪穴住居	古墳後期	B	F−2	壁周溝
ＳＤ	9	溝	不明	B	F・G−3	
ＳＤ	10	溝	平安	B	G−3・4,F−5,E・F−6	ＳＤ３とほぼ直交
ＳＫ	11	土坑	不明	B	C−6	
ＳＫ	12	土坑	不明	B	D−6	
ＳＫ	13	土坑	不明	B	D−6	
ＳＤ	14	溝	不明	B	E・F−6,D−7	円形に廻る
ＳＫ	15	土坑	不明	B	D−7	
ＳＫ	16	土坑	不明	B	D−7	
ＳＫ	17	土坑	不明	C	I−3	
ＳＫ	18	土坑	不明	C	H−3	
ＳＤ	19	溝	不明	C	G−3	
ＳＤ	20	溝	中世	D	D−4・5・6	浅い。SD21と平行
ＳＤ	21	溝	中世	D	D−8,E−5・6,F−3・4	浅く、断続する。南端でSD30に継ぐ。
ＳＤ	22	溝	中世	D	F−3・4	SD23と平行
ＳＤ	23	溝	中世	D	F−4	
ＳＫ	24	土坑	不明	D	H−4	
ＳＫ	25	土坑	不明	D	C−5	浅い落ち込み
ＳＫ	26	土坑	平安	D	D−5	土師器甕出土
ＳＫ	27	土坑	平安	D	D−5	
ＳＫ	28	土坑	不明	D	B−6	
ＳＫ	29	土坑	平安	D	B−7	
ＳＤ	30	溝	中世	D	D−7	SD21に継ぐ
ＳＤ	31	溝	中世以降	D	B−8	
ＳＤ	32	溝	中世以降	D	B−8	
ＳＨ	33	竪穴住居	古墳後期	D	D−8	北辺にカマド？
ＳＢ	34	堀立柱建物	不明	C	C−4・5,D−4・5	東西２間以上。W10°N
ＳＢ	35	堀立柱建物	平安	D	C−4・5,D−4・5	３間×２間。W3°N
ＳＢ	36	堀立柱建物	平安	D	E−6,F−6・7	２間×２間。総柱建物。N1°E。東西棟の可能性もある。





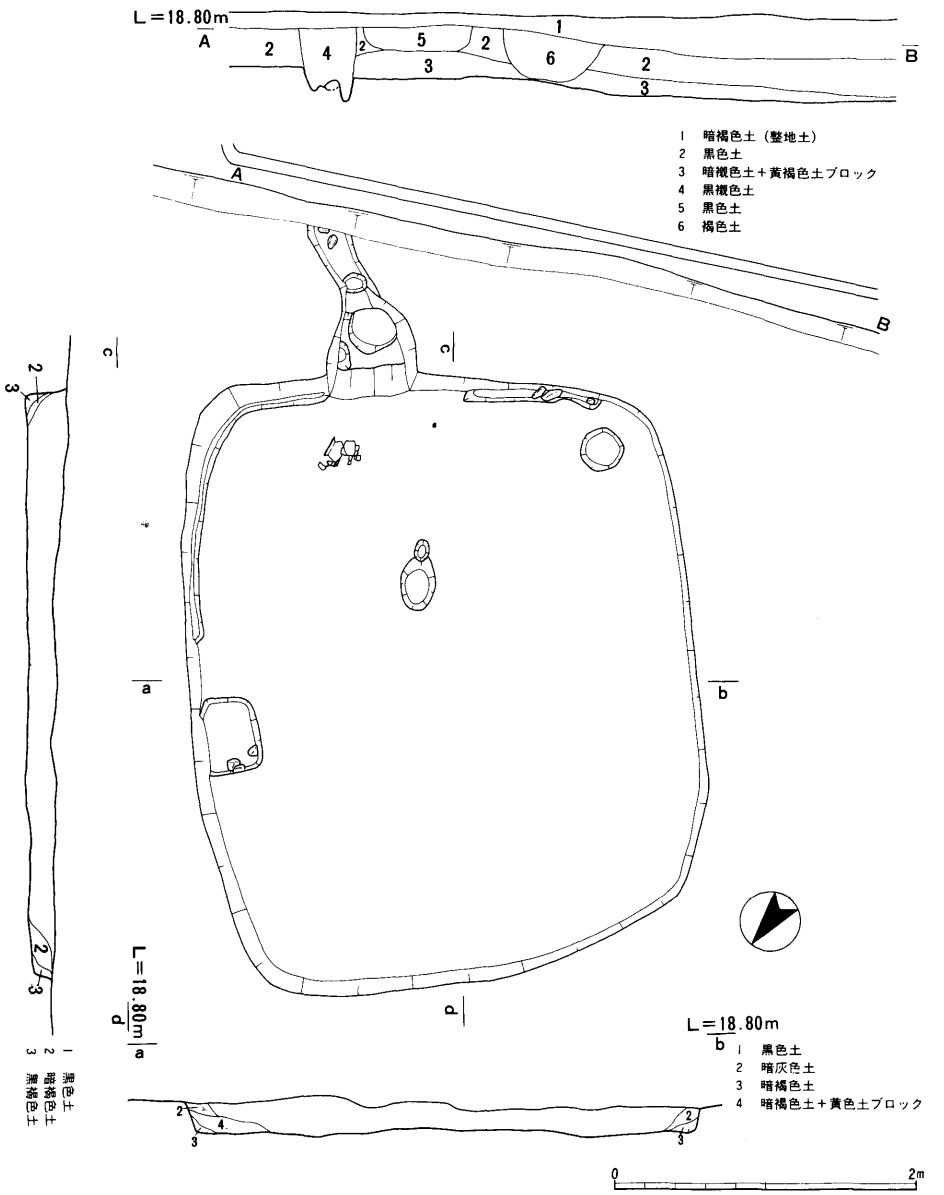


図７　ＳＨ６　実測図・調査区南壁土層図（一部）（1:50）

(2)平安時代の遺構

溝ＳＤ３　幅 0.6～1.0m、深さ 0.2～0.3mを測る。調査区を東南－北西方向にほぼ真っ直ぐに横断し、調査区外に延びる。灰釉陶器片が出土した。

(3)その他の遺構

溝ＳＤ２　調査区の北東隅で検出した。幅0.8m、検出面からの深さ0.4mを測る。両端は調査区外に延びる。埋土は黒色で土師器甕の取手が出土したが、時期は明確ではない。

ほぼ中央部から、土師器皿とともに焼けた骨片が出土しており溝の中に中世墓が切り込んでいたものと考えられるが、平面プランは検出し得なかった。

b　Ｂ地区（250m²）

Ａ地区より約10m西方に当たる。２つの建物に挟まれた、逆Ｌ字状の調査区である。

(1)古墳時代後期の遺構

竪穴住居ＳＨ８　調査区の北端で検出した。東南部を溝ＳＤ９に切られているが、ＳＤ９は浅いため床面まで達していない。南辺6.3m、検出面からの深さ0.25mを測る。北半部は調査区外のため不明であるが、南半部には、幅0.2m、深さ0.2mの周溝を巡らす。支柱穴は南側の２個を検出した。直径0.3m、深さ0.5mを測る。床面の堅く締まった部分は明瞭に区別できた。周溝の南辺東端の周溝が長さ0.6

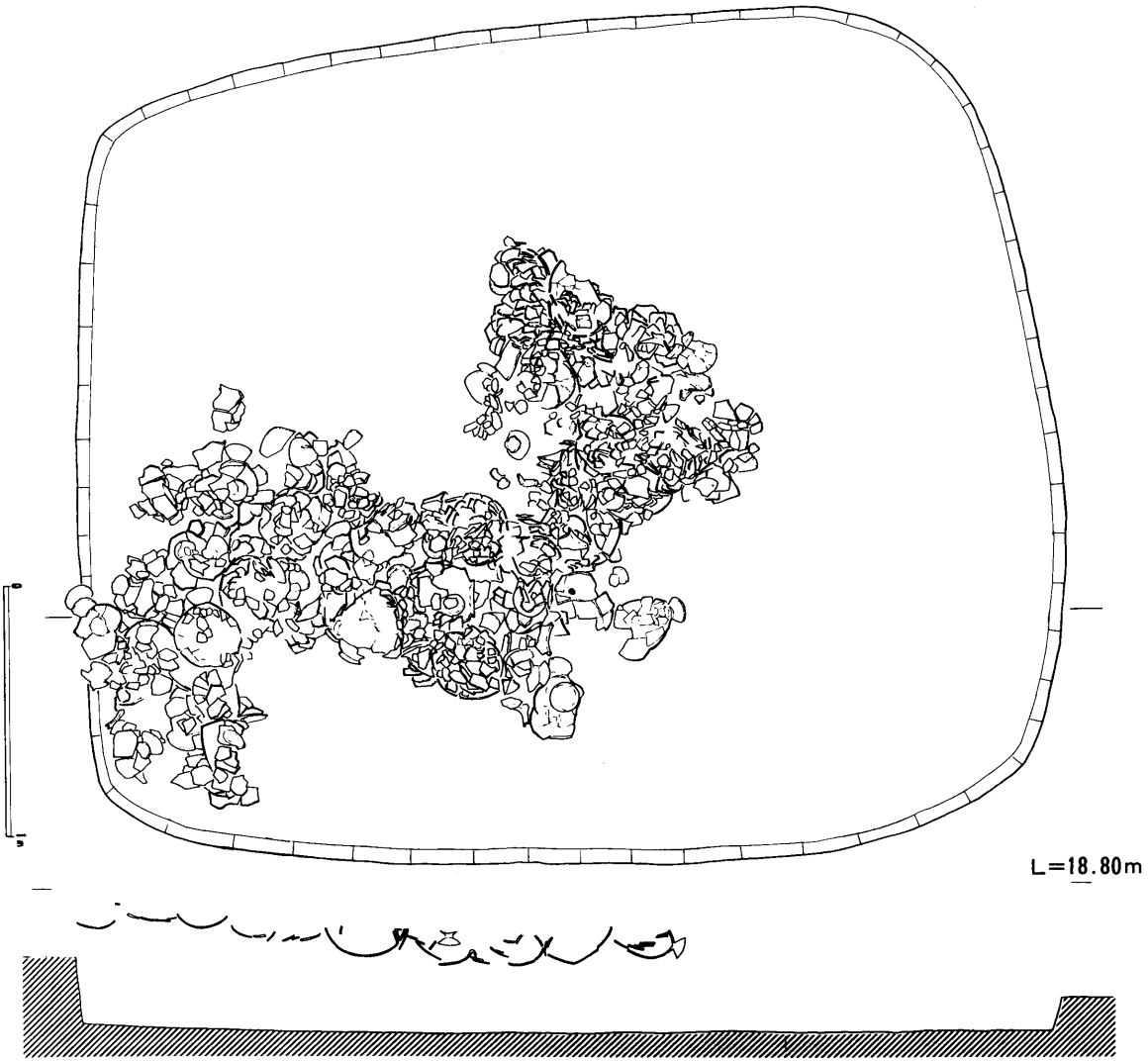


図８　ＳＨ６　遺物出土状況図（1:30）

m程度埋められ比較的締まっていた。堅い部分は、そこから支柱を避けるように西に曲がり、住居のほぼ中央に広がる。出土遺物は床面直上からの遺物が多い。床面検出中に臼玉２個が出土した。

溝ＳＤ14　幅1.5m、検出面からの深さ0.3mを測る、直径約15mの円形に巡る溝である。出土遺物は土師器の細片であるため、時期は確定し得ないが、古墳の周溝である可能性も残されている。

(2)平安時代の遺構

溝ＳＤ９　調査区の北東部で検出した、幅1.2m、検出面からの深さ0.1mを測る溝である。北西－南東方向に延び、ＳＨ８の南東部に重なり、ＳＤ10を切る。北西方向に進むに従い浅くなって行く。途絶するか、もしくは検出面より上層でより北西に延びるものと考えられよう。

溝ＳＤ10　幅２～0.4m、検出面からの深さ0.8～1mを測る。北東－南西方向にほぼ直線状に延び、調査区中央部でやや西に曲がる。南西方向に進むに従い遺存状況が悪くなり狭く、浅くなる。北東部では遺存状況が良く断面Ｕ字形を呈し、最下部は方形に落込み、水がたまっていたための変色と推定される黒色土が検出された。

(3)その他の遺構

土坑ＳＫ11　調査区の西部で検出した。大半は現建物の下になり不明である。出土遺物は、土師器片が少量あるのみで、時期などを決定し得ない。

土坑ＳＫ12　調査区の中央部で検出した。長径1.4m程の楕円形を呈する。深さ0.1mと浅い。少量の土師器片が出土したのみである。

土坑ＳＫ13・15・16　いずれも調査区南西部で検

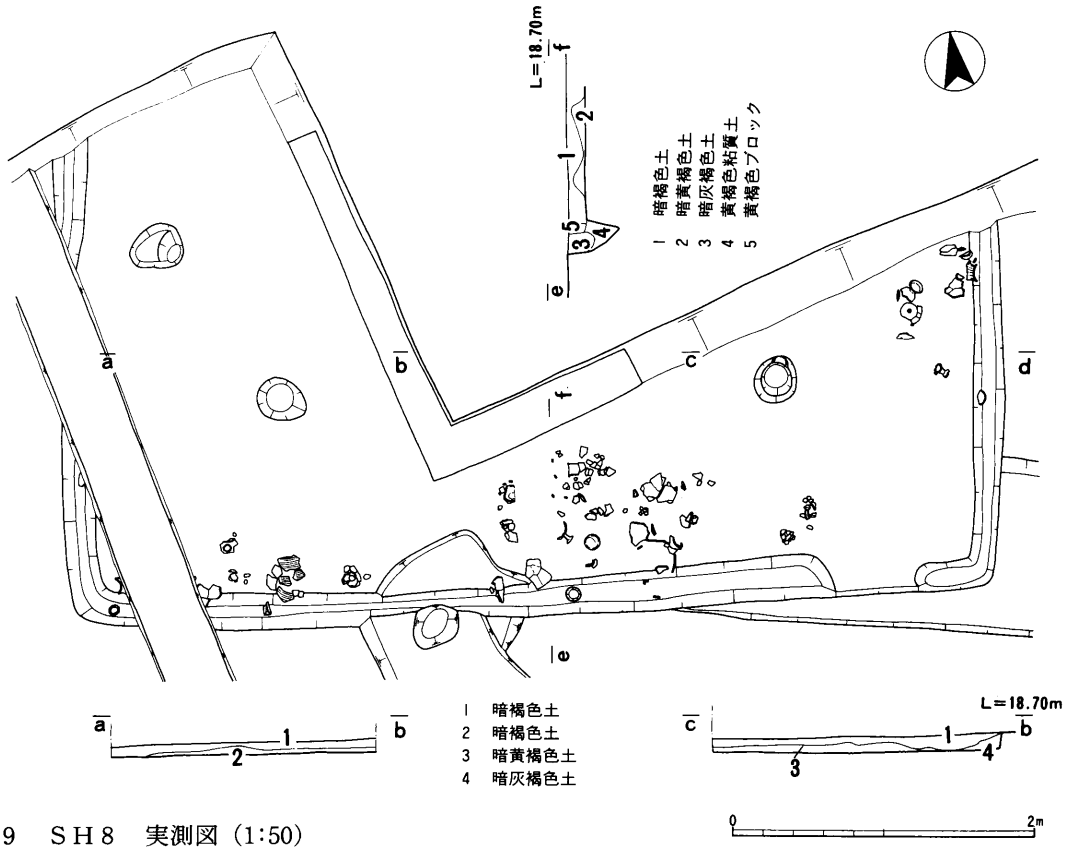


図9　ＳＨ８　実測図（1:50）

出した小規模な土坑である。時期その他は不明。

c　Ｃ地区（100m²）

Ｂ地区から北西に30m程離れた地点で、東西に細長い調査区である。４辺を排水路、旧建物などに、中央を排水管に攪乱されていた。

(1)時期不明遺構

掘立柱建物ＳＢ34　直径0.3mのピットが1.5m間隔で直線に並ぶ。東西方向に２間以上の掘立柱建物である。棟方向はW10°Ｎ、埋土中から土師器片が出土した。

d　Ｄ地区（400m²）

Ａ地区から東に100m程離れた地点である。病棟に囲まれた中庭で、花壇、築山、植栽を配置し、憩いの場となっている。

(1)古墳時代後期の遺構

竪穴住居ＳＨ33　北西角の一部を検出したにとどまる。東部をＳＤ21に切られている。南北長は2.2mと短く、東西長は調査区外に延びるため不明である。東端の調査区境界部分から焼土と思われる赤色土が検出されたのでカマド等の施設があるものと考えられる。幅0.15mの周溝が巡る。これらにより住居跡と判断した。

(2)平安時代の遺構

掘立柱建物ＳＢ35　東西３間×南北２間の建物で、規模は6.0m×4.2mである。棟方向は東西で、柱間は、南北が2.2mの等間隔、東西が東から1.8m、2.0m、2.2mである。

掘立柱建物ＳＢ36　東西２間×南北２間の総柱建物で、柱間は東西が東から2.0m、2.2m、南北が北から2.1m、2.1mである。棟方向は東西、南北ともに可能性があり決しがたい。南に1.3m離れて２間の柱列があり、庇と考えられる。庇は東西棟であれば東西の桁に取り付き、南北であれば身舎の梁に取り付くものと考えられる。

土坑ＳＫ26　調査区中央のＳＤ20東で検出した。一辺0.8mほどの方形の土坑である。底近くから土師器甕(1)が出土した。

土坑ＳＫ29　調査区西辺中央部で検出した。南北2.1m、すり鉢状に深くなり最深部は0.8mを測る。出土遺物は瓦器、ロクロ土師器などがある。平安時代後期のものと考えられる。

溝ＳＤ20　調査区中央やや西寄りを南北に走る溝である。幅0.6～0.8m、調査区内での長さ9.1mを測る。途絶するか否かは不明であるが、ＳＤ21とほ

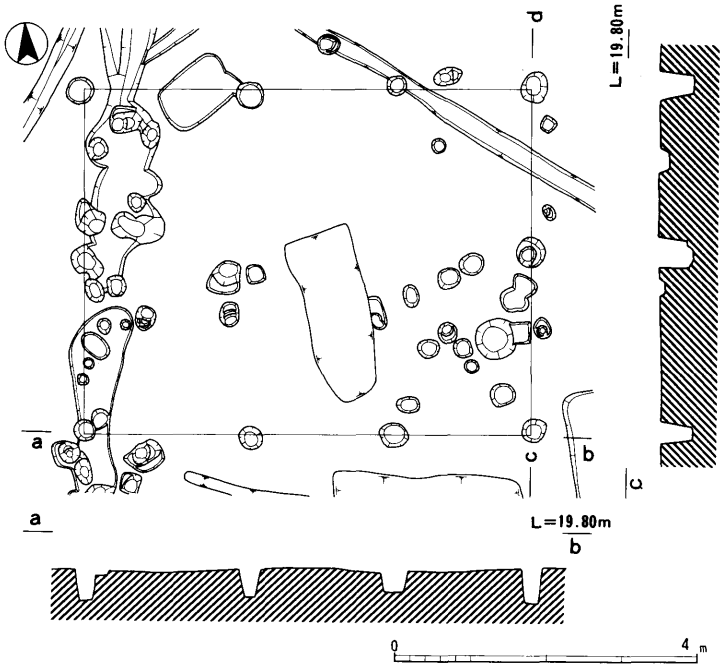


図10　ＳＢ35　実測図（1:100）

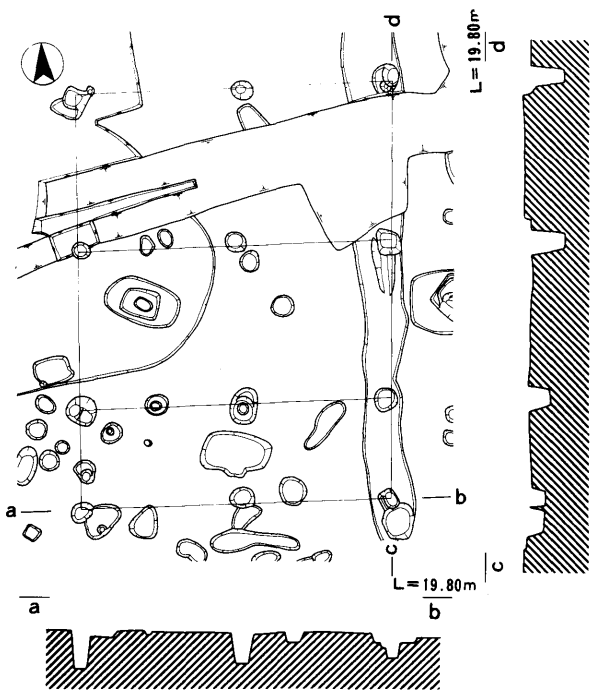


図11　ＳＢ36　実測図（1:100）

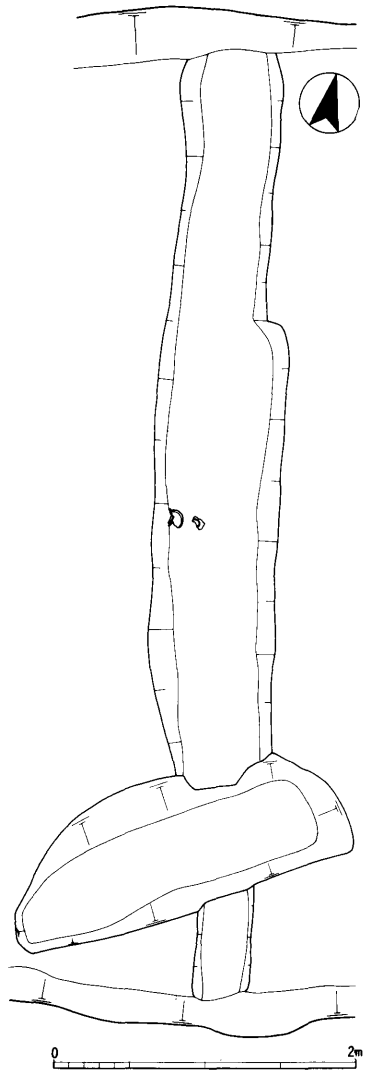


図12　ＳＤ２　実測図（1:50）

ぼ並行であることから、ＳＤ20もさらに延びる可能性がある。出土遺物が少なく時期は決しがたいが、ＳＢ35を切っているので、平安時代以降であろう。

溝ＳＤ21・30　調査区中央を断続しながら南北方向に走る溝である。断続するためとりあえず南端から3.5mほどをＳＤ30としたが、一連のものと考えられよう。幅0.5～1.0m、確認された長さ19mを測る。南端でＳＨ33を切っている。

Ⅳ．調査のまとめ　―D地区の遺物―

今回の調査で出土した遺物は、整理箱に110箱余である。古墳時代後期を中心とする遺物が出土した。

A～C地区の遺物については、3次調査でその中間を調査することが決定しており、遺構も重複することが想定されるため、3次調査報告と合わせて報告することとし、今回は単独地区であるD地区の遺物について記述することとする。

D地区は包含層がほとんどなく、かつピットが大半であったため遺物は整理箱に数箱でありその大半が小片であった。以下におもな出土遺物の概要を記す。詳細は遺物観察表を参照していただきたい。

D地区の遺物

平安時代後期の遺物

土師器甕（1～3）口径18～20cmを測り、外反する短い口縁部を持つ。口縁端部は上方につまみ上げあられるものと、内に折り返されるようなものがある。いずれも平安時代後期[21]のものと考えられるが、1・2に比べて3はやや下る可能性があろう。

土師器椀（4）ロクロ製土師器[22]である。体部を欠損する小片であるため、詳細は不明であるが、底部外面に糸切り痕が残る。

瓦器（5～7）椀は高台部分のみの小片である。ミガキ調整について観察不可能な部分が多いので細かな時期検討は行えないが、概ね平安時代後期[23]とした。

陶器（8～10）椀類（8・9）は山茶碗と小椀である。ともにSB35付近の包含層出土である。藤澤良祐氏による編年の第4形式[24]（12世紀中葉頃）と考えられよう。（10）は瓶口縁部の小片である。

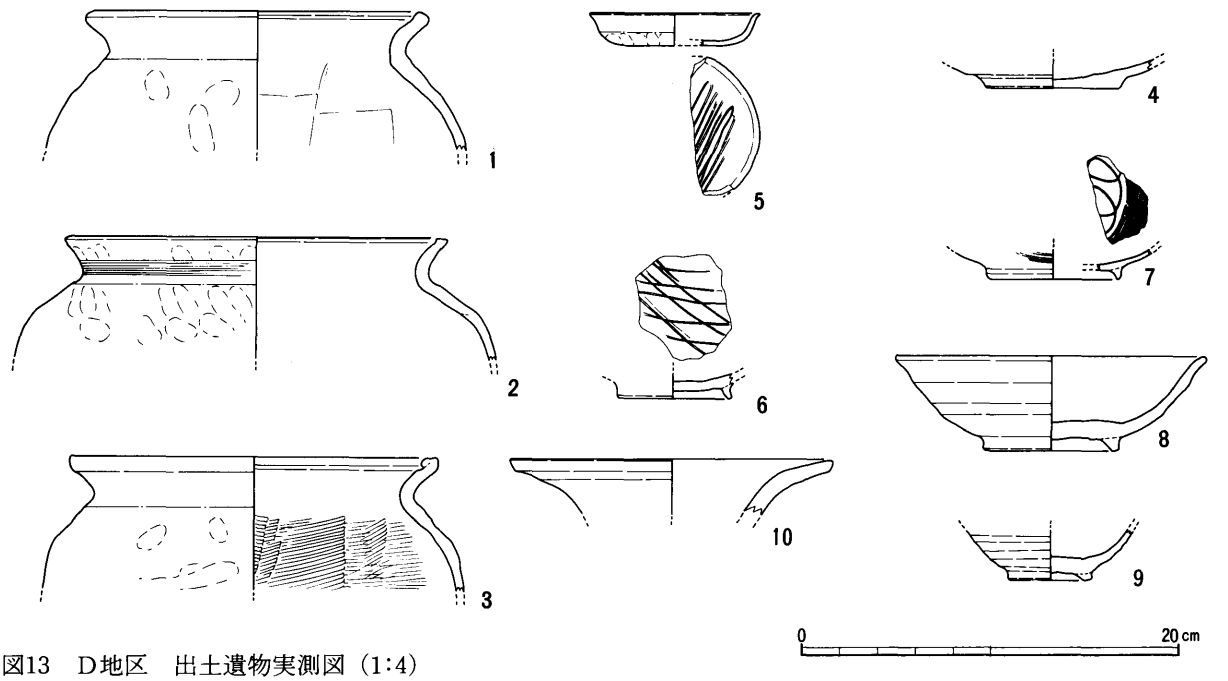


図13　D地区　出土遺物実測図（1:4）

番号	実測 番号	器種等	地区	遺構・層位名等	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	焼成	特記事項
1	40－3	土師器甕	D	SB36(F－7Pit1)	口径18.4	肩部にオサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗い	にぶい橙	1／3	並	体部内面に工具によるナデ
2	40－1	土師器甕	D	SK26	口径20.2	オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗い	にぶい黄橙	1／5	並	頸部のナデは強い
3	40－2	土師器甕	D	SK28	口径19.4	オサエ・ナデ→口縁ヨコナデ・内面ヨコハケ	やや粗い	灰白	1／9	並	口縁端部折り返し
4	41－3	土師器椀	D	E－5包含層	底径7.2	ロクロナデ→糸切り	やや密	浅黄橙	3／8	並	
5	41－7	瓦器皿	D	SK29	径　9.0	オサエ→ナデ、内面に平行暗文	密	灰白	1／2	並	いぶしは剝離
6	41－6	瓦器椀	D	SK29	底径5.1	高台にナデ、内底面に粗い斜格子状暗文	密	灰白	高台のみ	並	いぶしは剝離
7	41－5	瓦器椀	D	D－7包含層	底径7.0	高台にナデ、内底面に連続輪状暗文	密	灰	1／6	並	
8	41－1	陶器椀	D	H－4検出中	口径16.4	ロクロナデ→糸切り→高台にナデ	密	灰白	1／2	並	山茶碗
9	41－4	陶器小椀	D	D－4包含層	底径4.4	ロクロナデ→糸切り→高台にナデ	密	灰黄	1／2	並	山茶碗　小椀
10	41－2	陶器瓶	D	E－4検出中	口径約17	ロクロナデ、内面に自然釉付着	密	灰黄褐	小片	並	口縁部小片

表2　遺物観察表

Ⅴ．調査のまとめ

古墳時代後期頃の台地上の様子　当該時期の遺跡の広さは、今年度の第２次調査の結果、及び昭和55年の第１次調査、今回の第２次調査に先立つ試掘調査などを考え合わせると、古墳時代後期には、台地上の相当の範囲に集落が広がっていたと考えられよう。また、平成８年度中に津市教育委員会によって台地北部で行われた試掘調査結果によると、遺構は確認できなかったが、土師器などの古墳時代の遺物は量は少ないものの堆積土中や表面観察などで確認されたそうである。

以上のことから、大正から昭和初期にかけて行われた土地区画整理などによって、どの程度の動土が行われたかは判然としないが、集落は台地上に広く所在していた可能性が高いといえよう。ただ、全てが関連するのものか、また、同時存在の範囲など、まだまだ不明な点は多い。特に、台地西部については、現在大部分が住宅地となっているおり、表面観察もままならないような状況なので西方への広がりは想定の域を出ない。

竪穴住居６の集中土器　ＳＨ６からは、土師器台付甕が半ば整然と並べられたような状態で相当量が出土した（図８）。これがなにを意味するものか、確たる証拠は得られなかったものの、いくつかの仮定を考えたい。

土師器甕に何かを入れて保管していたか、あるいは土器そのものを保管していたのか。様々なことが考えられるが、県内では他に類例をみない出土状況である。出土した土師器甕は、黒ボク土中にあったためか、本遺跡出土土師器の中では遺存状況が良好である。外面、内面ともに調整はよく観察できる。また、使用のもっとも大きな痕跡である付煤は、１点確認したのみである。付煤がないからといって直ちに未使用であるとすることは危険であるが、その可能性は高いといえる。また、須恵器の生産が始められ、普及しつつある時期といえる６世紀前半にあって、貯蔵を目的と考えた場合には須恵器甕が使われなかったのはなぜか。掘立柱建物に保管せずなぜ竪穴住居なのか、など多くの疑問が生じる。調査担当者としては、土師器を保管したのではないかと考えたいが、それも積極的に肯定するには根拠に乏しい。この結論は全ての調査が終了した段階で改めて考える機会を持ちたいと思う。

平安時代　このころには、溝によって意図的に区画されている様子が窺える。Ａ地区の溝13とＢ地区の溝15は方向はほぼ平行であるが、約６ｍの間隔がある。両者の位置関係が興味深い。平安時代に比定できる掘立柱建物が今回のＤ地区で２棟、１次調査で１棟のあわせて３棟が検出されている。

ただ、来年度以降も病院整備にともなう高茶屋大垣内遺跡の調査は継続する。特にＡ・Ｂ地区の間は調査対象であり、土層の堆積も厚いため、建物下に遺構が遺存している可能性が高い。このため今年度の調査結果を持って判断することは適当ではない。第３次調査を待って改めて報告することとする。

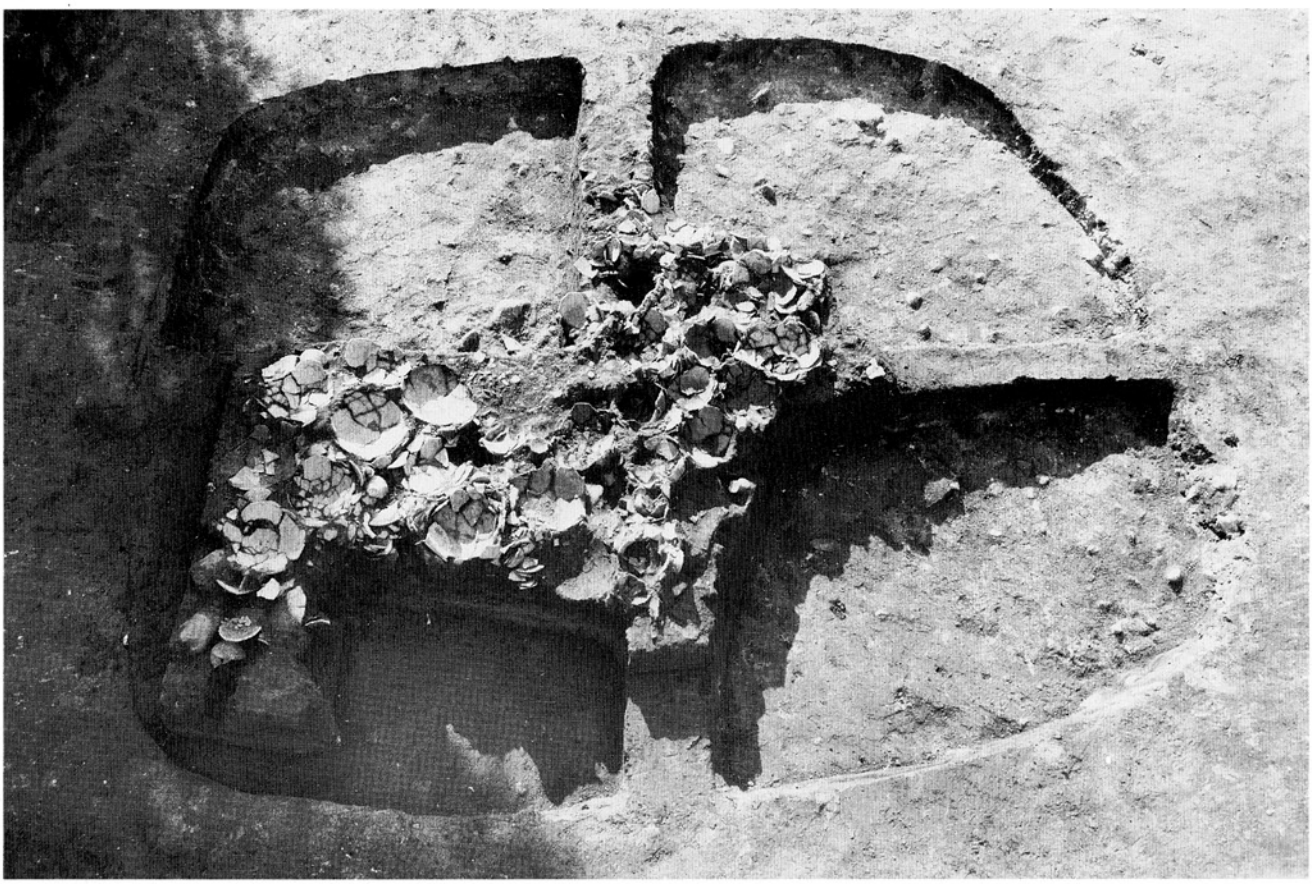
高茶屋地域の開発は大正年間にはじめられ、昭和にはいって海軍工廠が建設されるに伴い、高茶屋大垣内遺跡のある地区には海軍共済病院や工員の住宅などが建設されていった。台地上の起伏がこのときに均されたことも十分考えられる。

また、昭和30年代には県立病院の整備が始まり、現在のように幾つかの施設が集められたことなどから、遺跡は早い時期に破壊されてしまった部分が相当あるものと考えられる。

しかし、遺構検出面の深さによっては現在の建物の下に遺構が残されていることを確認した部分もあり、今後の調査に期待したい。

註

１）吉水康夫『本宮遺跡試掘調査報告』（本宮遺跡調査会　1973）
２）伊藤克幸他『大垣内遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1982）
３，６）『三重県埋蔵文化財センター年報４』（三重県埋蔵文化財センター　1993）及び村木一弥氏のご教示による。
４）『津市の文化財』（津市教育委員会　1989）
５，11，14，17）『津市遺跡地図』（津市教育委員会　1988）
７）大森孤舟『三重県風土史蹟』（1916、1979復刊　歴史図書社）
８）浅生悦生「池の谷古墳」『津市の文化財』（津市教育員会　1989）
９）小玉道明、山沢義貴『久居古窯址群発掘調査報告』（久居古窯址群発掘調査団　1968）
10）橋本滋「藤谷遺跡－埴輪古窯跡－」『津市民文化』第４号（津市教育委員会　1977）
12）辻富美雄『長持元屋敷遺跡調査報告』（久居市教育委員会　1980）
13）『久居市遺跡地図』（久居市教育委員会　1984）
15，16，18，19）『三重の中世城館』（三重県教育委員会　1976）
20）近代についての記述は『高茶屋の歩み』（高茶屋小学校創立百年記念事業実行委員会　1977）によった。
21）新田洋「三重県における古代末～中世にかけての土器様相」『三重の古文化』59（三重郷土会1988）
22）「斎宮の土師器」『三重県斎宮跡調査事務所年報1984』（三重県斎宮跡調査事務所　1984）
23）山田　猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究６』日本中世土器研究会　1986）
24）『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ（瀬戸市歴史民俗資料館　1982）

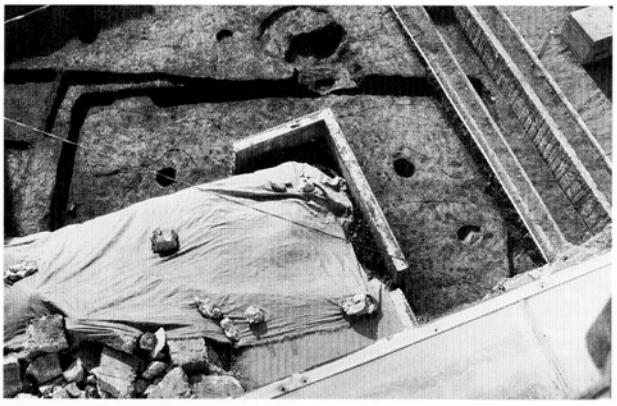


ＳＨ６　遺物出土状況

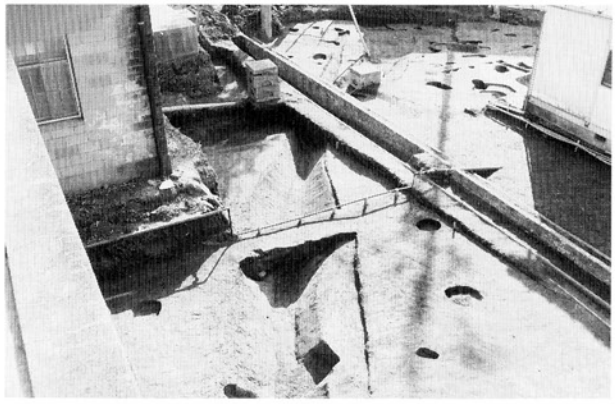
ＳＨ６　同部分

図版2

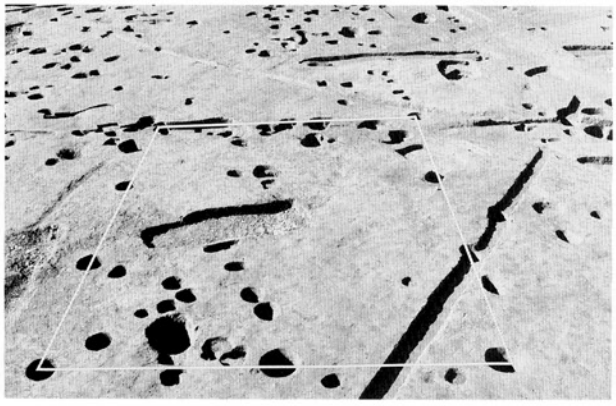
D地区　全景　東から



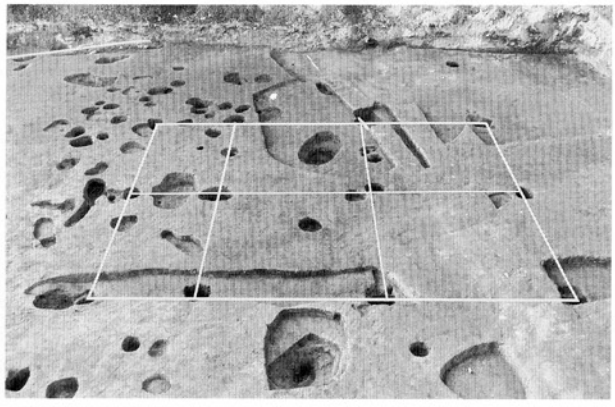
SH8　北から



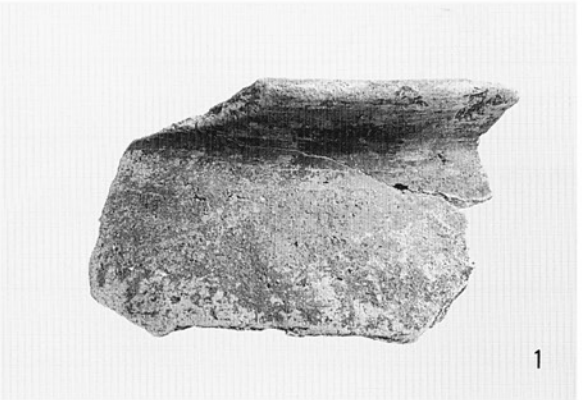
SD10　北から

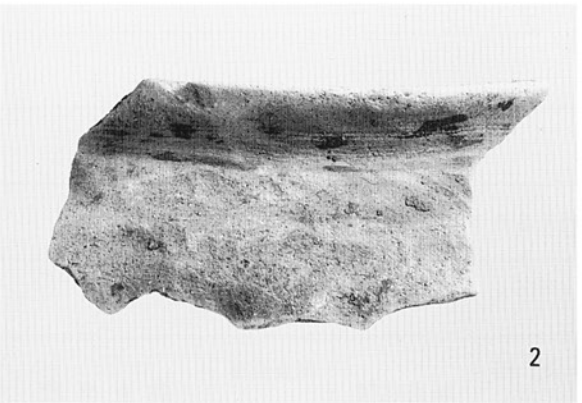


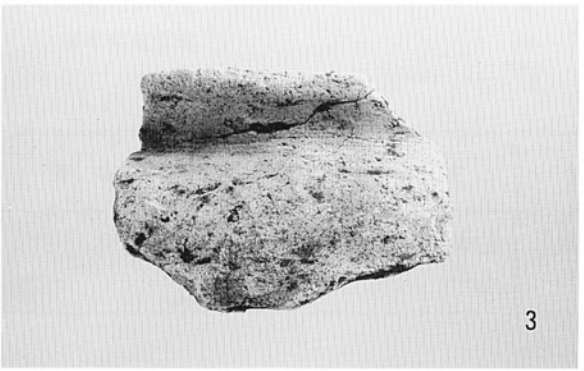
SB35　東から

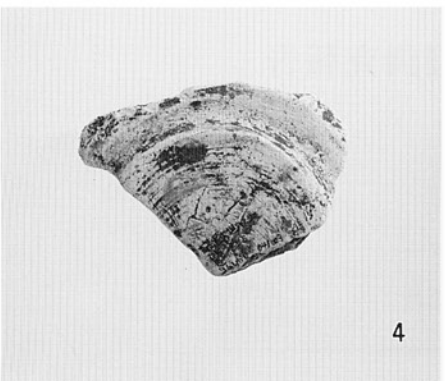


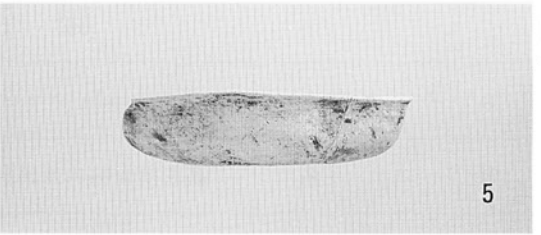
SB36　東から

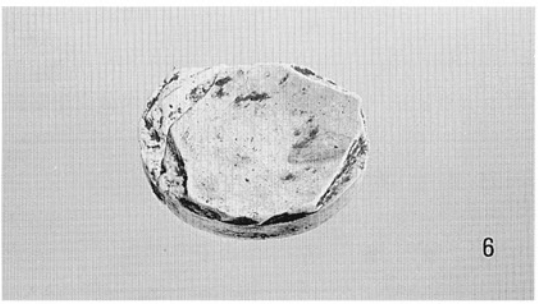


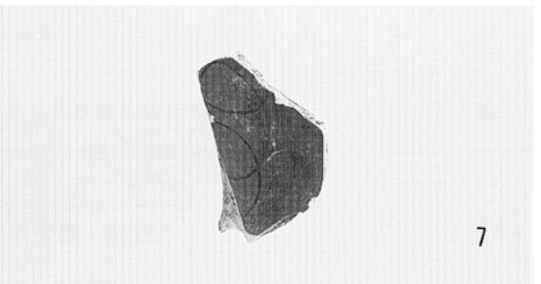


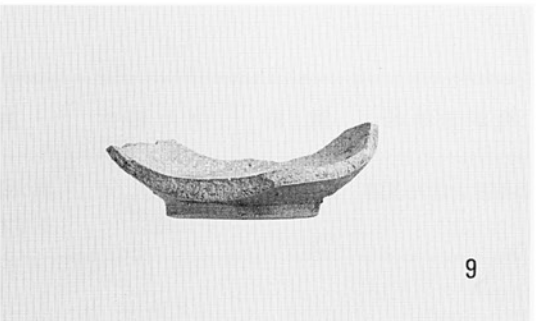












D地区　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たかちゃやおおがいといせきだいにじはっくつちょうさほうこく
書名	高茶屋大垣内遺跡(第２次)発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１６４
編著者名	田中久生
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03　三重県多気郡明和町竹川５０３　ＴＥＬ　05965－2－1732
発行年月日	１９９７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかちゃやおおがいといせき 高茶屋大垣内遺跡	つししろやまいっちょうめ 津市城山１丁目	242012	264	34° 40′ 14″	136° 30′ 41″	19961001 ～ 19970120	1,600㎡	県立高茶屋病院 施設整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高茶屋大垣内遺跡	集落跡	古墳時代 平安時代	竪穴住居・溝・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器	

平成９(1997) 年３月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年８月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告164

高茶屋大垣内遺跡(第２次)発掘調査報告

1997年　３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　オリエンタル印刷株式会社